

五 民間信仰と俗信

日常生活において人間関係や生産活動を続けていくうえで、宗教は欠かせぬものであるが、仏教や神道などの体系の整った宗教とは別に、生活のなから生みだされた生活慣習としての宗教、いわゆる民間信仰といえるものがある。例えば自然に対する信仰として、山・海・川・水・岩・樹木・日・月・星・風・雨・雷などに聖なるものの霊を認めて神格化した。原始信仰にもつながる、これらの神仏には多様な性格が付与されたのである。

わが国は近世以来、近代まで、農耕生産を中心とした社会組織であり、信仰の多くは農村に受容されやすい性格を持っていたといえよう。すなわち、五穀豊穡・村中安全・無病息災であり、これに商売繁盛などが付加され、現世利益的祈願をそれぞれの霊験ある神仏に求めるようになる。特に農民や漁民は大地や海、天候といった自然が相手で、人間の意志ではどうにもならないものだから、どうしても神仏の加護を仰ぎたくなる。

信仰の目的は日々の生活において平穩無事なることを求めることである。その目的のために神仏の靈力に依存し、あるいはその力を作用させようとして祈願という信仰行為がとられる。これには共同祈願と個人祈願がある。集落の生活においては、村中安全や五穀豊穡を祈願する年中行事としての共同祈願がある。また、臨時的にも雨乞いなどの共同祈願があるが、このような祈願は共同体全体の利害が一致するかどうかによるものである。

個人祈願は持病の病氣平癒（いひ）といったものから子どもの夜泣きや疣（いぼ）とり、子授けや安産といった身近かな生活に密着したものである。それぞれの祈願をした護符・神札・お守りを身につけたり、家の戸口に貼ったり、神棚にあげたり、集落境に立てるなど、さまざまな方法がとられる。また、願を掛けるとき、あるいは願が成就したときの奉納物として絵馬（えま）や幟（ぼし）、幕などが見られる。

民間信仰を維持していく組織のひとつに講という集団がある。講を結んで信仰や飲食を共にすることがおのずから社交や娯楽を意味していた。そしてそれは同時に村人相互の生活を共同にする場でもあった。

諸信仰を基盤にして成立した民間信仰の、往時の面影を伝えるものとして、神社境内や祠堂、路傍に塔碑・石祠・諸仏があり、また、生業の場である田や畑、生活の場である屋敷内にも諸神仏がまつられている。

現在、これら信仰の対象になっていたものの多くは河川改修や道路改修、圃場整備などで元の場所を追われ移転したものも多く、その存在を忘れられたものも少なくないので、石像物からかつての信仰の一端を見てみよう。

また、民間信仰の一部ともいえる俗信は、非科学的であるとして現代社会では認められないことが多く、特に迷信といわれるものは社会生活上に実害を及ぼすものまである。一方、俗信のなかには長い経験によって得られた知識ともいふべきものもあるので、一概に無視することはできない。俗信、あるいは信ずるに足りないものとして否定的に捉えるのではなく、これらの事象を積極的に検証し、その上で正しい評価を行うことが必要と考えられる。

一部衰退したところもあるが、集落の茶講内や老人会、有志によって維持され、定期的に集まって信仰が続けられている。夏の火つけ行事では子どもクラブが中心になり祭りが行われているところが多い。

(一) 民間信仰

1 講

講は、元來仏教に起源をもつもので、仏典を研究することから、始まったものであるが、講説こうせつ(講義して説明すること)のための集會や集會に参加する人々の組織までも広く称するようになった。

信仰は時代を下るにしたがって、信仰と娯樂を旨とした集いに変わっていく。一般に庶民にとつて、娯樂手段など少なかったたので、皆が一堂に會し、共に飲食し談じあいながら待つ、あるいは徹夜をするという魅力が信仰に加わり力になったものであろう。

遠隔地への参拝は講中全員が揃つてということとは不可能なので、講中の代表者が参拝をし、帰つてくると祭りをして神札を配付する、代参という方法がとられるようになる。講を維持するために講金の積立を行つたり、祭田などの共有財産を所有している。

仏教に關係する講として念仏講や大師講がある。ある一定の年齢に達すると念仏講などにはいつて念仏などを習う。真宗地域には年齢別の年寄御講としわいおこつ・中老御講ちやうらう・若者御講わかものがあり、毎月一度行われている。

(1) 三夜待・六夜待

月の満ち欠けは日時の推移を知る手段であり、農耕や漁撈は月の運行によつて行われていた。それだけに月は古くから信仰の対象となつていた。

特定の月齢の月の出を待つて礼拝する月待ちという講行事で、二十三夜と二十六夜が広く行われている。これは満月の後の半弦の月が特徴的であつたためと思われる。二十三夜は男性で三夜待、二十六夜は女性でお六夜さんと称されている。講員は家廻りに集まり、月待ちの本尊の掛け軸をかけ、お参りした後、飲食や話に興じて、月の出を待つのである。本尊としては勢至菩薩・月天子などを祀る。特に三夜待は、旧曆七月二十三日が祭り日であつた。

現在では待行事の意味は薄らぎ、懇親の場として親睦を深める行事の意味合いが強くなつており、二十三夜、二十六夜にこだわらず、日時を決め、講員の家だけでなく料理屋などで行われている。もとは戸主、戸主の妻が



二十三夜尊 下弦の月の上に座した勢至菩薩は二十三夜の本尊として信仰されてきた。
慶応四年(1868)初夏建立
(久保田宿 祇園社)



お六夜さん 女性の月待ち、お六夜さんのときに掲げられた掛け軸。
(麦新ヶ江)



伊勢講碑（その2）宝暦三年（1753）建立の「太神宮」と刻まれた碑。講衆11名の記載がある。（横江 八幡神社）



伊勢太神宮碑・元和四年（1618）の伊勢太神宮碑である。僧侶とおぼしき人物が、現世安穩と後生善処を願って建立したものである。（福所 権現社）

現世安穩
信心施主月秀心月
奉勸請伊勢太神宮 奉謹讀神祇放土
後生善処
元和四年三月吉日



維持文化八年辛未十一月吉祥日

伊勢講碑（その3）像は兩宝童子と、頭に五輪塔を戴き、右手に金剛宝棒を突き立て、左手に宝珠を捧げ持っている。神仏習合によって日本で創作された尊像で、真言宗の兩部神道では大日如來の化身とし、また日向に現れた天照大神の姿とする。文化八年（1811）11月建立

（上恒安）



伊勢講碑（その1）貞享二年（1685）建立の「天照太神宮」碑である。講衆7名の記載がある。（香椎神社）

貞享二乙丑二月吉祥日
天照太神宮 講衆
肥陽佐賀郡大俣莊永里村
森 安右衛門
滴恩傳兵衛
同 加左衛門
同 兵左衛門
新開丸四良右衛門
小林 彦兵衛
古賀九良左衛門

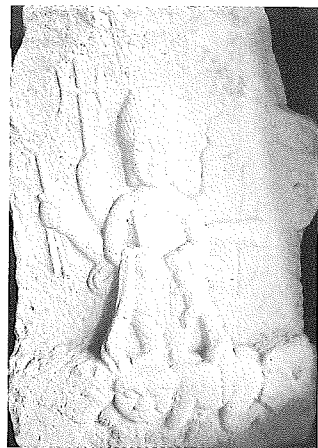
主体であったが、のちに一定の年齢別に複数の講仲間が組織され、冠婚葬祭などでは互いに協力しあうなど強い絆で結ばれるようになった。

講の記念碑の二十三夜塔は、下弦の月の上に坐した勢至菩薩像を彫ったものが町内の随所に見られる。勢至菩薩の有縁日が二十三日というところから、二十三夜の本尊とされたものである。

(2) 伊勢講

庚申講とともに近世において隆盛をきわめた講であったが、早い時期に消滅し、今はまったく見られない講の一つである。路傍や神社境内に見られる「太神宮」「天照皇太神宮」と刻された石祠が伊勢講の記念碑である。

伊勢講は伊勢信仰つまり三重県伊勢に鎮座する伊勢神宮（天照大神を祀る皇太神宮（内宮）と豊宇氣毘売神を祀る豊受大神宮（外宮）とからなっている）の信仰集団である。伊勢神宮は天皇家の祖先神として皇室の庇護を受け、私幣をささげることは禁じられ、民衆の信仰とは無縁であった。しかし、時代が下るにしたがって民衆の間に大神宮崇敬が広まった。そうした信仰を広めたのは御師と呼ばれる人たちであった。御師は諸国を巡り、御祓大麻を配りあるき商人や農民といった庶民へ参詣を説き広く浸透していった。御師というのは御禊師・御詔刀師から始まるといわれるが、祈願・奉幣をとりついで参詣者に宿を提供したりした。この御師の活動により地域単位による伊勢講の組織がつくられ、伊勢参宮の風を生じ、代参者を立てて行われ、日本全土に伊勢信仰が普及するようになった。庶民にとって、参宮は一生に一度の願いであった。町内には、参宮記念としての伊勢講碑がいくつか見られる。「太神宮」などの刻字塔の他に、兩宝童子を彫ったものがあり、「講衆」として講仲間の名



庚申(その3) 青面金剛の像で一面六臂の忿怒形で六本の手にはさまざまな武器を持っており、足下に邪鬼を踏みしめている。
寛政九年(1797)建立
(上新ヶ江 毘沙門堂)



庚申(その1)「庚申」とのみ刻まれた素朴な文字塔。
享和元年(1801)建立
(麦新ヶ江)



庚申(その4)「猿田彦大神」と刻まれた文字塔。江戸時代中期以降、庚申の神として猿田彦は大いに盛行し塔に刻まれるようになる。
嘉永元年(1848)十二月建立
(太郎次郎社)



庚申(その2)「青面金剛」と刻まれた文字の石碑。下部に3名の氏名がみえる。
延宝二年(1674)霜月建立
(下満 若宮神社)

延寶貳甲寅天
奉勸請青面金剛
霜月吉辰日
土橋藤左衛門
空閑源太左衛門
西岡傳左衛門

前が記されている。

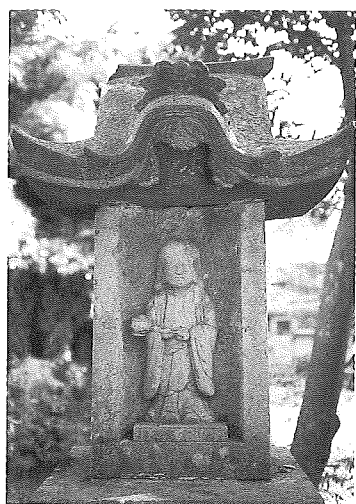
(3) 庚申講

甲乙丙丁...という十干と、子丑寅卯...という十二支を組み合わせると、六〇組の干支ができる。これを用いて、年、月、日、時などを表してきた。その五七番目が庚申で、六〇日に二度、庚申の日が巡ってくることになる。この日に講を開くものである。奈良時代に、庚申の夜に寝ると夭折するという中国の道教の説が伝えられ、この夜は徹夜をするという守庚申が宮廷中心に行われた。貴族たちが大勢集まって、歌合、碁、詩歌、管弦などの宴遊を行いながら夜明けかきをするという、遊樂的なものであった。

道教の説というのは、

人間の体内には三戸という三匹(上戸・中戸・下戸)の虫がいて、常にその人の行動を監視していて、庚申の日の夜に、寝ている間にひそかに身体から抜け出して、その人の罪科をすべて天帝に報告する。人間の生死をつかさどる天帝は、罪科に応じてその人の寿命を縮めるといふ。そこで庚申の夜は眠らないで、三戸が身体から抜け出さないようにする。と、いうものである。

このような、守庚申のやり方は、一五世紀のなかばごろ仏教と結びついたことよって、本尊ができ、守庚申は庚申待とよばれ全国的に広まり、道教的な色彩が薄らぎ、貴族や武士以外の人々も信仰するようになった。民間でも祭事後、公然と夜明けまで酒食の宴が許されたので江戸時代には庶民の間で盛行した。



聖徳太子 聖徳太子の少年期の孝養像といわれるもので太子講の本尊として建立されたものである。明治三年五月吉日建立

(香椎神社)

つた。聖徳太子が建築関係の職人の守護神となった経緯は明らかでないが、一説に、法隆寺や四天王寺を建設したからといわれている。建築関係の同業の職人たちが、特定の期日に集まり、太子をまつり飲食しながら親睦を深めたり、賃金の協定やさまざまな申し合せを行うなど、職人仲間の運営にとつて大事な集まりとなっていた。

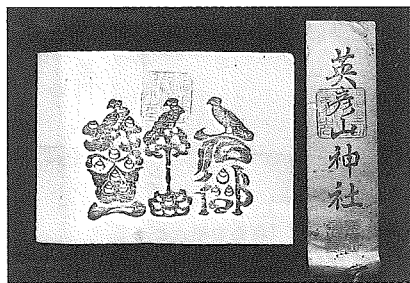
庚申には祭神が多い。仏教式庚申信仰では、「青面金剛」(帝釈天の使者)を本尊とし、下つて江戸時代後期になると、山崎闇斎が説いた神道的庚申信仰が広まり、「猿田彦大神」を祭祀するようになった。猿田彦大神は天孫降臨の際に道案内をしたという神である。

今日、各地に見られる庚申塔は庚申待を何回か行つたときに、供養塔として造立されたものである。町内には文字塔と像塔があるが、江戸時代の造立のみで明治以降の塔は見あたらぬ。早い時期に庚申講は消滅したものであると思われる。

(4) 英彦山講

英彦山(一一九六)は、修験の霊場として知られる。英彦山の信仰圏はほぼ九州一円に広まっていたが、もつとも盛んであったのは肥前であった。その理由の一つは藩政時代から鍋島氏が熱心に信仰したことによるもので、英彦山上宮の修築を始め、銅鳥居(寛永十四年・一六三七)など多くの寄進物がある。

藩政時代、庶民に許された旅は唯一信仰の旅であった。信仰の旅はいつしか物見遊山の旅へと変化をした。伊勢参りや本山参りは一生に一度可能かどうかという旅であったが、英彦山は比較的、近いので毎年代表者が交代で参詣をした。



英彦山神社の神札と牛王宝印 牛王宝印には、神使の鷹が描かれている。中世、武士たちは起請文として利用した。

参拝者の多くは農家であるので、英彦山の春祭り、御田(三月十五日)にあわせての参詣が多かった。

(5) 太子講

同一職業集団が信仰と親睦をかねて行う講がある。職業的講の代表といえば「太子講」である。太子というのは聖徳太子のことで、十七条憲法、冠位十二階をつくり、遣隋使を派遣し、また仏教家とさまざま姿をもっており、日本の歴史上もつともよく知られた人物である。平安時代になって、天台宗を開立した最澄により太子信仰が盛んになり、さらに鎌倉時代以降、登場した新興仏教も太子との関係をつけ、各宗派が取りこんでいくようになった。江戸時代になって太子信仰は一般民衆の間にひろまり、左官・大工・畳屋・石工・鍛冶屋などのほか、山仕事に携わる樵夫・木挽などと主に建築技術に関係のある職人層で構成される「太子講」が行われるようになった。

2 仏教関係の信仰

(1) 観音信仰

観音は観世音菩薩の略で、また観自在菩薩ともいう。諸経典にその名がみえるが、なかでも『法華経』の中の「観世音菩薩普門品」は、通称「観音経」といい、一心に観音の名を念ずれば、あらゆる災難から救ってくれると説かれている。このような現世利益的性格が受け入れられ、さまざまな利益を与えてくれる身近な菩薩として捉えられてきた。

初期の観音菩薩は聖（正）観音と呼ばれるものであったが、のちにさまざまに変化した形の変化観音が現れてくる。十一面観音、千手観音など多くの顔や眼、手足などを持った異様ともいえる姿の観音である。聖観音にこれらの変化観音を加えて六観音、七観音の信仰が生まれ、さらに、多くの人々の諸難を救うために、時や所、相手に応じてさまざまに姿をかえて現れてくるという三十三身に因んで三十三観音が成立する。

慈愛に満ちたその姿から、とくに女性の信仰があつく、安産・子育てを祈願する観音として仏教の経典にはない子安観音などもつくられた。

観音は柔和な慈悲相が一般的であるが、馬頭観音だけは怒りの相をしている。煩惱や悪心を断ずる功德があるといわれており、他の観音と比べ、明王（大日如来の命により諸悪魔を降伏する諸尊。不動明王・大威徳明王・

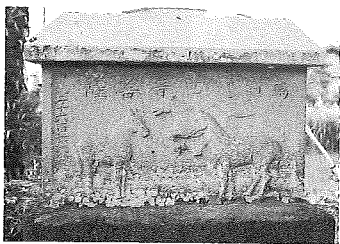
愛染明王など）に近い性格を持っている。

民間信仰では、頭上に馬頭を戴いていることから、牛馬の安全を祈願する守護仏としての信仰が広まり、馬の無病息災を願ったり、死馬の供養に各地の路傍に石像が造立された。像容を表したものと、馬頭観音の文字を刻んだものがある。

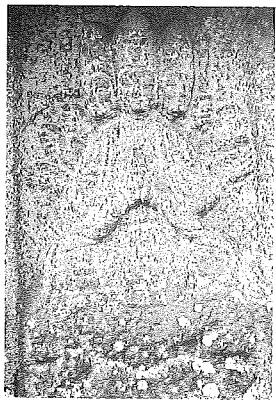
久保田町のほぼ全集落に馬頭観音はまつられており、それだけ町内に馬が多かったことを物語っている。『わが村のすがた』（昭和二十四年一月）より役用の牛馬頭数を見ると、牛が一〇頭、馬が三六〇頭を数えている。



馬頭観音（その2）三面八臂の忿怒像である。文政八年（1825）に建立されたものである。（上新ヶ江路傍）



馬頭観音（その3）レリーフ状に馬を三頭彫った珍しい馬頭観音像である。建立は紀元2600年（昭和15年）を記念して建立された新しいものである。（草木田）



馬頭観音（その1）昔、筑前の大守がこの前を通行したとき、馬から落ちて怪我をしたので建立したという伝説がある。文政九年（1826）十二月建立（香椎神社一の鳥居横）

民間信仰

(2) 地藏信仰

仏教においては、地藏菩薩は釈迦入滅後、五六億七〇〇〇万年後に弥勒菩薩が出現するまで六道（人が生前になした善悪によって、生死を繰り返す六つの迷界。地獄道・餓鬼道・畜生道・修羅道・人間道・天上道）の一切



十一面観音 観音菩薩のなかで最も馴染み深い十一面観音は、頭上に十一の顔を持つ変化観音。その功德は、諸病をのがれ、財宝をえ、幸福をもたらすとされる。天明五年（1785）二月吉祥日建立（太郎次郎社）

衆生を救済する菩薩で

あると説かれている。

平安時代中期以降の
末法思想の広まりと浄
土教信仰の勃興によ
り、衆生済度(救うこ
と)の菩薩として人々



地蔵菩薩 高さ1尺30寸幅80
字ほどもある大きな地蔵尊で、子
どもたちは夏の川遊びで冷えた体
を抱きついて温めたという。
文政二年(1828)八月建立
(久富西路傍)



六地藏 地蔵が六道を輪廻転生する
衆生を救済することから六つの
分身を考えて六地藏が生まれた。町内
にはこの石幢に彫ったもの他に六体
並べたものがある。
(上新ヶ江 毘沙門堂)

の信仰をあつめるようになった。地蔵菩薩は六道のいずれ
にも現れ、冥土におもむく死者が、閻魔王から裁きを受け
てひどい苦しみにあうことから救ってくれと信じられ、
この世とあの世の境に立つというので、路傍や村境、墓地
入口に祀られることが多かった。

地蔵は菩薩であるので観音や弥勒・勢至・文殊菩薩など
と同じように菩薩形をとるべきだが、頭をまるめ法衣をま



三界万霊 この世における生命
あるものごとくこの霊を宿ら
せ、この塔を回向することによっ
て万霊を供養するという。
文政十年(1827)九月建立
(上新ヶ江路傍)

とうた僧形である。これはいかめしい菩薩の姿では衆生が近づきにくいので、親しみやすい声聞形(釈迦在世こ
ろの弟子の姿)をとっているといわれる。すなわち右手に錫杖を持ち、左手に宝珠を捧げた行脚の姿である。
地蔵が六道をめぐって衆生を導くという信仰から六つの分身を作り六地藏が生まれた。町内の六地藏は、丸彫

り像を六体並べたもの、石幢に六体彫ったものがある。

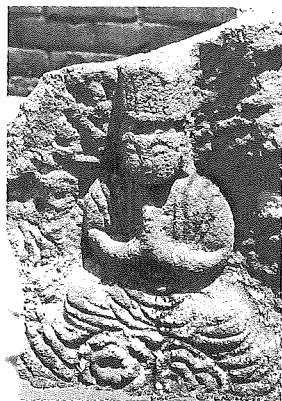
ほかに、地蔵尊が主尊としてまつられたものに万霊塔がある。台座に「三界万霊」と刻まれ、その上に地蔵尊
が座している。三界とは欲界(食欲、性欲等欲の世界)、色界(物質の世界)、無色界(欲も物もない世界)の三
つ、または過去、現在、未来の三つの世界をさすともいわれている。

三界万霊塔は、この世の生きとし生けるものすべての霊を、この塔に宿らせているという意味を持っており、
この塔を回向することによって、すべての霊を供養することができるのである。

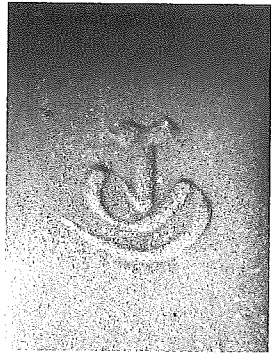
(3) 大日信仰

町内のほぼ全集落に、じやーにつつあん(大日如来)が祭祀されている。大日如来は密教における中心の仏で
あり、宇宙の根源とされている。これほど多く祭祀されている理由はわからないが、次のようなことが類推でき
るのではなからうか。

彦隆山西持院という修験場があったことは、修験道の影
響が大であったことがうかがえる。山岳信仰に源を発する
修験道は、仏教がひろまるにつれて漸次、その教義を取り
入れるが、特に密教思想を取り入れるのである。このため、
崇拜対象の中心には密教における中心の仏、大日如来が据
えられた。



大日如来(その1) 密教では
最高の仏といわれている。手の
結び方は智拳印という大日如来
独特のものである。町内には数
多く祀られている。
(大立野北 北の森稲荷神社)



弁財天 (その2) 梵字は「ウ」と読み宇賀神の種字といわれている。日本古来の神である宇賀神は弁財天と同神であり、宇賀弁財天といわれている。寛延元年(1748)十一月建立 (搦東 八幡神社)



弁財天 (その1) 天女の姿で、琵琶を手にしている。元来は農業神であるが、音楽や知恵の神に転じ、福德神として七福神の一員となる。(下新ヶ江 三丁廻)

(5) 弁財天信仰

七福神の一員として知られているが、もとは古代インドの川の女神で、豊饒の神として尊崇され、のちに仏教にとりいれられた。川の神すなわち水の神ということで農業神であつたが、川の流れの音から音楽・弁舌(知恵)の神に転じ、さらに福德神として信仰されるようになった。本来の水の神としての性格から、平野部では堀や川などの水辺に祀られることが多い。神使は水辺を好む蛇で、巳の日を縁日とし、五月の初巳の日を祭日としている。また、弁財天と神使を同じくする穀物神の宇賀神と結びついている。

春秋の彼岸には遍路(お巡りさん)の姿が見られ、各地区で接待がなされていた。現在はそれも見られなくなった。

3 名神大社の信仰

(1) 天神信仰

天神といえは菅原道真をおもうくらい、一般に深く浸透しているが、古くは、国つ神に対する天つ神を意味していた。

香椎神社境内の「大日靈尊」(明治十三年九月)の石祠と北田公民館前の「大日靈尊」(大正十四年九月)の石像は、神名とおぼしき名であるが、いずれも大日如来を祭祀したものである。大日靈尊というのは、『日本書紀』で天照大神の別名とされたもので、大日如来は神仏習合で天照大神の本地仏とされたものである。

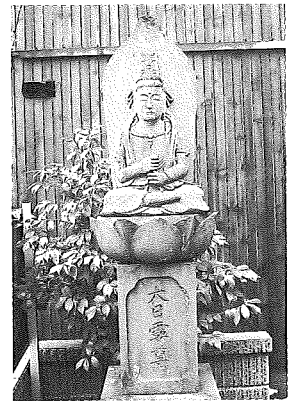
(4) 大師信仰

真言宗の開祖の弘法大師空海は「お大師さま」の通称で広く信仰され、町内各所のお堂にまつられている。禅宗地域でも、弘法大師が広く信仰されているのは、宗派を超えた民衆性があるのであろう。

石像は円頂(まるい頭)で法衣を両肩に着用し、左手に念珠を巡らし、右手に五鈷杵(密教の仏具)を支えている。弘法大師の伝説として、全国を巡錫(巡って法を説くこと)しており、水がない村を訪れた大師は杖で水の出る場所を教えたという。四国八八カ所は、弘法大師が開創した巡礼霊場として知られており、これを地方にうつし、集落の小堂を札所に組み込んだ巡礼霊場が多い。これらの小堂に、



弘法大師 台座の「遍照金剛」は、仏が放つ光明がたまねく照らし、その本体が堅固であることをあらわしている。文政十年(1827)建立 (搦東公民館)



大日如来(その2) 台石の「大日靈尊」というのは、天照大神の別名で神仏習合で本地仏とされたものである。大正十四年九月吉日建立 (北田公民館)



八幡宮 八幡神は最も神仏習合が進んだ神である。梵字の「キリク」は八幡神の本地仏、阿弥陀如来をあらわしている。武士の信仰が篤く、この祠は村田氏によって尊崇されていた。享和元年（1801）三月再建（栃東 八幡神社）

赤い鳥居と社頭や神前の神使の狐像が目につく稲荷社は、全国でもっとも社数が多い神社である。稲荷は農業・漁業・商業をはじめとする、諸産業の守護神とされるほか、屋敷神・招福の神・託宣神・憑き物などといった多様な信仰の対象となっている。

(3) 稲荷信仰

八幡神社の祭神は、応神天皇を主神とし、神功皇后を併祀するのが一般的であるが、これらに仲哀天皇、武内宿禰、住吉神などを加えることが多い。神道を基盤に仏教や道教と融合し、成立した信仰で八幡神の神格も多岐にわたっている。八幡神社の総本社は豊前の宇佐神宮（大分県宇佐市）である。

若宮というのは、神の子として祀られる御子神のことで、本来は荒々しい崇りで人々を恐れさせたために、新たに祀られた御霊神を意味すると考えられる。しかし、現在、一般的に言われている、若宮八幡は応神天皇の子の仁徳天皇とされる。これは、後世になって説明されたことである。

(2) 八幡・若宮信仰

道真の薨去の日が二月二十五日なので、天満宮の祭日は二十五日として、春祭りや夏の豆祇園、集落の大祭りなどもそれぞれの月の二十五日に行われている。

この時代は、疫病の流行や不吉な事件は、すべて恨みを残して死んでいったものの怨霊が祟りをなすと信じられていた。落雷や疫病の流行が道真の怨霊と結びつけられ、道真は雷神、疫神と考えられるようになった。そして、天曆元年（九四七）に、平安京の北の地に道真を祀る北野天満宮が創建される。北野の地は以前から、神聖な場所とされ、天神の祠があり農耕生活と結びついた天神・雷神信仰があった。

雷は稲妻・稲びかりの語があるように、農耕には欠くことのできない存在であって、干ばつに苦しむ農民たちは雷神に雨乞いをしたのであった。このような農民たちの天神・雷神へ対する農耕信仰の基盤の上に、道真の怨霊としての雷神の性格が加わって、天神信仰は農耕信仰として発展していく素地をつくり上げていった。

怨霊の活動がしだいに鎮まると、儒学者や文人の間で、文道の大祖と仰がれるようになり、学問の神・詩文の神・儒家の神としてあがめられるようになり、時代をへるにしたがい学問の神としての信仰に定着してゆく。



天満宮 始めは崇り神として祀られていたが、道真の学徳を慕い、学問の神へと変身をし天満大自在天神とあがめられ、多くの人の信仰をあつめている。文久三年（1863）二月建立（下新ヶ江 地藏堂内）



稲荷社 稲荷は、地域・家を問わず最も信奉者が多い。嘉瀬川の改修以前は堤防下にあり、漁の行き帰りに航海安全・大漁を祈願して参拝していた。明治39年建立 (大立野北 北の森正一位稲荷社)

の祭りである二月初午の時期は、春に山の神が里に降りてきて田の神となるという農耕開始の時期にあたる。

一方、漁業神としての稲荷の信仰も顕著である。豊漁を願い航海の安全を祈念する漁業神として、今日エビスと並んで信仰されていることは漁村部に多くの稲荷神が祭祀されていることからもうかがえる。

稲荷信仰の漁村における普及にはさまざまな要因が考えられようが、現在ではその要因を明らかにすることは困難である。ただ、漁村と商業地域あるいは農村部との物資の交換などによる交流などから普及したとも考えられる。

町内においては、集落の氏神社の境内社として数多く見られるが、なかには個人的な信仰であったものが次第に周囲の人たちの信仰をあつめてひろがったと思わせる稲荷社もある。

上恒安では四月八日と十二月八日に、その年の当番が祐徳稲荷神社に参拝をし、お札を受けて帰り各戸に配っている。

永里集落の東に正一位稲荷神社がある。十二月八日の祭りには、来年の農作物の出来具合を占う。

(4) 祇園信仰

祇園さんと親しみを呼ばれる神は、八坂神社・須賀神社の通称である。本社の京都八坂神社は、もと祇園感神院といっていたが、明治の神仏分離で名称を八坂神社と改めた。それを機に全国の祇園社の多くがそれにならった。祭神は現在、素戔嗚命とするが、本来は牛頭天王であった。牛頭天王はインドの祇園精舎の守護神で、わが国で素戔嗚命と習合した。牛頭天王は別名を武塔天神といい、『備後国風土記』逸文に、武塔天神が巨旦将来に宿を請うて断られたが、貧しい兄の蘇民将来はアワ飯でもてなしをした。それで武塔天神は吾は速須佐雄能神であると言乗、後に疫病が流行ることがあれば、蘇民将来の子孫也といつて腰に茅の輪をつけると疫病から逃れると教え

た。牛頭天王は、荒ぶる神スサノオと習合して疫病を防御する神として信仰を広める。春から夏にかけて蔓延する疫病を疫神の祟りとして、祇園御霊会(祇園会とも)という祭礼が盛んに行われるようになる。祭礼は祓えと山車・山鉾(山笠とも)・

風流踊りを中心とする賑やかなもので今日の夏祭りの形式を作りだしたのである。疫病は怨死した人の御霊や、牛頭天王などの行疫神(病気を流行らす神)が疫疫をもたらすと信じられて

文化十四丁丑八月神吉日祀

台座銘 右 願主 當村

若者中

左 鶴丸祐右衛門



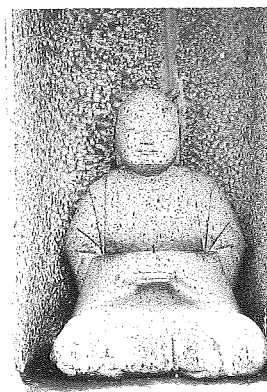
牛頭天王 祇園社(八坂神社)の祭神である。牛頭天王はもと、インドの祇園精舎の守護神といい、また薬師如来の垂迹神とされる。文化十四年(1817)に若者中などにより建立されたものである。(上新ヶ江路傍)

いたので、御霊会ではこれらの御霊を慰めて鎮めようというのである。各地の祇園祭りは都で行われた祇園御霊会の影響を受けて伝播したもので、小城町須賀神社の祇園祭りの山笠もその一つである。

(5) 山王信仰

山王の本社は比叡山山麓の日吉大社で大山咋神を祭神とする山の神である。山王というのは神道の理念としての神であるが、民俗でいう山の神は神道の枠外の民俗の神、民間信仰の神としてとらえられたものである。民間信仰では山の神は春に里に降りてきて田の神となり、秋に再び山に戻り山の神になるといい、山と里の間を去来すると考えられてきた。山王が平野部では農業神として信仰されているのは、このような民俗的な両面の霊格を持つていると考えられているからであろう。

里の農民にとって、山の資源は貴重なものであった。青草は馬の飼料、田の肥料として利用されていた。さらに山は稲作に欠かせない水の源として、山の神は水を司るみくまりの神という面を持っているのも農業神としての一面である。また、山の神の実態は祖霊であるという説もある。先祖はつねに子孫を見守っており、稲作を基本とする社会にあつては豊穰をもたらすのが先祖の祖霊の役目であった。



文政元戊寅天
十一月吉良日

山王社 町内における唯一の山王神である。山麓部に祭祀されることが多いのは、山の神としての意識が強く田の神との去来信仰が考えられる。
文政元年(1818)十一月建立 (下満)

県内の山王系の神社では、申年に田舞を伴う祭りが行われるところが多い。四月ごろ、田起(こ)しから種時き・田植えまでの所作を演じて豊作を祈願する予祝(よしげ)の行事が行われる。

4 海に関わる神仏の信仰

(1) 沖の島信仰

有明海沿岸一帯に、オーガンさん、オンガミさん、オオガミさん、オシマさんという神社、石祠がいたるところに祭祀されている。これらは有明海唯一の島、沖の島の信仰にもとづくものといわれる。

沖の島は、鹿島市大字飯田字江福の箱崎から東方五^キ余りのところにあつて、男島・女島の二島からなる小さな岩礁の島で、満潮には姿を没し干潮には姿を現す。現在は灯台が設けられている。潮の干満にあわせて姿が見え隠れする沖の島に神秘さを感じ、神が存在すると考えたのは、当然のことであった。祭神については一定した見解がないが、次にいくつか資料を示しておく。

鹿島藩四代藩主鍋島直条の著した地誌『鹿島志』によれば、

浜津の東海上七里余に小島あり。御髪と称す。古より藤津郡と称す。周回数百歩、潮盈つれば則ち隠れ潮ひけば則ち出づ。俗伝に、昔神あり其の髪を剃りて之を海に投ず。留まりて島と為る。因て之を名づく
とあり、さらに

余按ずるに吾邦興玉尊を以て船魂神となし、あるいは興神と称す。此の島は海船の往来する所、故に往昔

興玉を祭れるなり。俗に興神と御髪と倭音近きを以て誤りて此の説をなすものか。未だ知るべからずとある。

大木惣右衛門が著した『肥前古跡縁起』(寛文五年—一六六五)によれば

沖の御神は天照太神宮の御弟素盞鳴尊也、水神にて御坐ける、國中の貴賤雨乞の祈願を掛て専ら願ひを成就す、立願は浮立也、大船小船に取乗て彼の島の四方に押寄せ、大鼓、鼓を打立て神慮を冷め奉る。不思議也忽風吹出雨降國土を閤し侍る諭如何なる大風にも此の浮立の船は子細なく陸に着侍ける。潮の引きたる時には此岩三つに現し、其上に石のほこら即沖神の御神體也、是は鍋島甲斐守直澄の建立也、此のほこら建立の時神變を一々に吉田殿へ申されければ即ち萩原殿沖神の祝を遊ばし直澄へぞ與へ給ひける、是ぞ石のほこらに彫付て感應に備ふ、靈験新にして利益殊に明白成。

元文五庚申天三月十七日



澳島大明神 有明海特有の神である。沖神、沖祇、御髪などという。佐賀平野、有明海沿岸では干ばつするとき、最後の雨乞い手段として沖の島参りを行う。元文五年(1740)三月建立(搦東 八幡神社)

さらに『太良岳年祭勸化略縁起』には、

和銅年中行基菩薩来て、自ら彌陀・釈迦・観音の三軀を制作し、本地として太良岳三所大権現と尊崇す。尊体を太良岳に納め、左髪を武雄の領内へ投し黒髪山と崇め、右髪を海中に投し化して島と成ると云う。今の御髪大明神と唱える瀬是なり

とある。

オシマさんと称されていることについては、次のような言

い伝えがある。

昔、お島という娘が老父と二人で暮らしていた。ある年、干ばつで農民が困っているのを見かねて、お島は神に雨乞いの願をかけ、有明海に身を投じた。その後、お島の体は沖の島に流れついた。お島の願い通り、雨が降り、豊作となったので、農民たちはお島を豊作の神として祀り、沖の島をお島にちなんで、オシマさんと呼ぶようになった。

以上のように祭神については一定ではない。

信仰については、古くは航海神、水神として漁家の信仰が中心であったが、時代をへるにつれ、水を必要とする農業神としての性格を持つようになったのである。

〈参考〉

大立野集落の沖祇大明神

境内に大正十三年八月の社再建のりに建立された改築記念碑に由緒が記されている。

当社ノ口碑ヲ按ズルニ今ヲ去ル三百有餘年慶長ノ頃、一老漁夫曰々今ノ神社ノ邊ニ舟ヲ繫ギ上陸スルヲ常トセシガ海夕芦ノ中ニ不思議ノ光アルヲ看ル、之正シク我信仰スル沖嶋ノ神靈此ノ地ニ降臨マシマスモノト信ジ、時ノ領主龍造寺政家公巡視ノ際言上セリ公モ深ク喜ビ給イ此ノ地ヲトシ神社ヲ建立シ沖祇大明神ト崇メ奉ル、当社ノ祭神ハ大海津見命ニシテ慶長十一年(一六〇六)八月朔日藩主政家公ノ勸請ニシテ代々ノ領主大祭ニハ代参ヲ立テラレシ、亦郷里ノ尊慕特ニ厚ク漁業者ハ御神ノ靈験新ナル之感銘シ毎年舊四月二十五

日二恒例祭ヲ行ヒ大漁ヲ祈願シ今ニ至ル

大正十三年塚原亀吉外數名社殿改築ヲ發起シ當社ノ由緒ヲ永ヘニ傳ヘン為碑ヲ建テ之ヲ刻ス
と刻まれている。

(2) えびす信仰

えびすは恵比須、恵比寿、蛭子、戎、夷などと書く。ふつくらとした笑顔に風折烏帽子をかぶり、右手に釣竿、左手に鯛を抱えて座した姿で現されている。

一般的にえびすは、海の幸をもたらす神として漁に携わる人々の信仰をあつめ漁業の神と言われているが、商業・農業などの生産活動の神とも言われ福神として広く信仰されるようになった。

蛭子とする説は、記紀神話で伊弉諾尊と伊弉冉尊の第

延享四丁卯天

正月吉祥日

三子が蛭子尊で、三歳まで足が立たなかつたらしく、そのため葦船に乗せて流し棄て、摂津国西宮の浦に流れつき、そこで祀られてえびす神となつたのである。

戎、夷は異邦人を意味するもので、元来、異郷から訪れて豊漁をもたらすものという信仰があつた。屋敷神としても信仰されている。



えびす 町内では海に近い集落で祭祀されているので、漁業神としての性格が強いと思われる。土井の古賀は、昔は舟があがってきた港であった。
延享四年(1747)正月建立
(中副 土井の古賀)

(3) 船魂信仰

船に祀つてある神、船魂は、船の竣工のときに船大工が船の中心部に祭祀した。船魂は各地で異なっているが、一般的には色紙でつくつた人形、女性の髪の毛、五穀、錢貨一二枚、サイコロなどをつくつて納める。

正月には餅などのお供えをする。久富では正月一日から三日間家で祀るところもあつた。戸主が船に行き、鏡餅・尾頭つきの魚二匹・なます・煮しめ・神酒等を供えて拝礼し、その神酒を持ちかえり、家族全員でお祭りをする。五月の節供のときにも船魂に供物をしてお祭りをしていた。

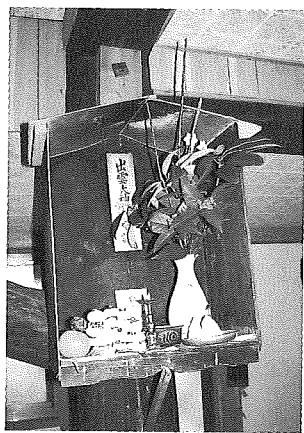
船上で炊事をするときは、炊き上げたご飯を釜の蓋に二つ盛つて供える。船魂は海が荒れるときなどは知らせてくれるという言い伝えがある。「チツチツツ」と虫の鳴き声のように聞こえるのを「船魂さんのさえらす」「船魂さんの鳴く」と言つて天候が悪化する前兆であると言われた。

漕ぎ舟や帆船のころは、潮汐表や天気予報などなかつたので、船魂に対する関心が強かつたが、エンジン船になつてからは薄らいだ。

(4) 龍宮・龍王・金毘羅信仰

民間信仰
沖の島信仰やえびす信仰のほかにも海にまつわる神々が数多く町内に祭祀されている。海の神は海の風波や潮の干満、雨水などを司るとされる自然神である。怒らせると風や不漁をもたらすが、祀れば航海の安全と大漁を約束すると信じられた。海のはるか彼方あるいは海底に海の神の住まう宮、龍宮があるとされ、魚は龍宮からもたらされるといふ。一般に海の神は記紀神話に登場する綿津見神とされるが、民間の海の神は土着の水神信仰に

正月に荒神に供えた餅を未婚の女性が食べると縁遠くなるという、老人と男児しか食べないというのも荒神の験力の強さをしめすものであり、子どもたちによる荒神相撲も強い力が授かることを期待してのことであった。結婚の際に嫁が婚家にはいるときに行われる、鍋蓋かぶせは婚家の荒神に仕えることであり、家族に死者が出



荒神 荒神は火伏せの神であるとともに食物や農耕の神。また家庭の守護神とされ、一家の盛衰をつかさどる家づきの神である。正月には荒神餅が供えられる。(新田 H13.1.4)

ことを竈というように、生活の根源としての火所は人々の結合の象徴であると同時に、宗教上の中心でもあった。そこに祀られる神は、荒神と呼ばれている。文字通り荒々しく崇りやすい神であるが、それだけに験力もめざましいと考えられ、単に火や火伏せの神というだけでなく、農作の神、家族の守護神としても信仰されている。かまどの近くに神棚を設けて神札を納めてまつるのが一般的であるが、普段使わないウーベッチーを荒神さんという家もある。

荒神信仰に深くかかわってきたのは盲僧であるが、神官や山伏、あるいは、オガミヤさんと呼ばれる民間宗教者が荒神の祭りを頼まれて行うこともある。

荒神は農作の神とも考えられ、田植え終わりのさなほりに早苗を供えていた。外出のときは必ず拜んで行き、オスミさん(かまどの煤 ヘグロともいう)を額に塗って、出かけると、荒神が引つ張るので無事に帰ってくるという、子どもが泳ぎに行くときも、荒神のご仏飯を食べて行くとかワソウ(河童)の難を逃れるという俗信もある。

正月に荒神に供えた餅を未婚の女性が食べると縁遠くなるという、老人と男児しか食べないというのも荒神の験力の強さをしめすものであり、子どもたちによる荒神相撲も強い力が授かることを期待してのことであった。

5 家の神の信仰

(1) 荒神

物を煮炊きをするかまど(竈 ヘッチーともクドともいう)は、家の中でもっとも清浄な火所とされた。家の



龍宮 通称「ひゃーらんさん」の石祠には「龍宮」と彫られている。祭神は不詳であるが水神・海神系であろう。「ひゃーらん」というのは、入り込まないということで、子どもたちの水難よけの神として信仰されている。享保十六年(1731)三月再建(中副)



八大龍王 通称松土井の近くにある「南無八大龍王」の石祠。干拓地は水が必須のことから、水を呼ぶという八大龍王が祭祀されている。(江戸)

おいて祀られた龍神である。龍は中国から伝えられ、日本の蛇と結びつき海の神・水の神となったのである。八大龍王は仏法の擁護者で、難陀龍王・跋難陀龍王・娑羯羅龍王・和修吉龍王・徳叉迦龍王・阿那婆達多龍王・摩那斯龍王・優鉢羅龍王の八尊のことである。このうち娑羯羅龍王が大海に住み雨を司るといわれている。航海の安全を守る海の神として、船に乗る人たちの信仰を集める金毘羅神も、蛇体の神とされている。中副に龍宮社、江戸に八大龍王、大立野北に金毘羅宮がある。

ると、その家のかまどは使わずに隣家のかまどを使うのは、火によってケガレが伝わるのを防ぐためである。

月の一日と十五日にごつくうさんをお供えし、正月・五月・九月には特別なお祓いをしてもらう。荒神に供える花は、トゲのある花や赤い色の花はいけないという家庭もある。また、一度使ったマッチは駄目だといわれていた。

(2) 便所神

便所にいる神さまで、具体的な神体は祀られていないが、髪の毛が長い美人できれい好きな女の神であるといわれている。便所神は便所の中に寝そべっているの、入るときは、「エヘン」と咳払いをしないと、神さんが起きないので踏みつけて咎めにあうという。妊婦を守ってくれると考えられ、そのため、妊婦が便所をきれいに掃除すると器量のよい子が生まれるといい伝えられていた。特定の祭日をもたないので正月に餅を供えるぐらいであるが、便所の入口の角に竹筒をつけて花を供えていた。

(3) 屋敷神

昔ながらの家においては、屋敷内の一隅に石祠が祀られていることが多い。屋敷地の片隅や大木のかげに祭祀されている。何も彫られていない自然石を立てたものから稲荷、えびす、観音といったものもあるが、なかでも多いのは「中央」と彫られたものである。

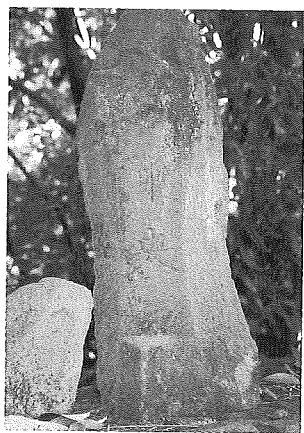
中央は、地の神つまり大地の神である。大地を神としての信仰は古くからの素朴な信仰で、屋敷神として祀られていることが多い。

高さ三、四〇センチの自然石の表面に「中央」「仲央」「中

央大明神」「中央地神」などと刻まれており、屋敷の良

(東北) または乾(西北)の隅に祀られていることが多い。

丁重に祀ってもよくないし、粗末にしてもいけないとい、よく崇る神といわれる。中央神の性格はよくわからないが、『中央考』(『佐賀民俗第九号』市場直次郎)によれば「地神をかまど神と同一神格であるとし、かまどを神座とする荒神に対してこれと区別して地荒神を中央神と称したと思われるふしがある。一略一肥前盲僧が伝承する『仏説地神大陀羅尼王子経』によれば、かまど神と地神とは同体であり、しかも中央に位置して守護するというのであるから荒神信仰の流布した民間で、地神を中央神と称して崇敬したであろうことは想像して難しくない」とある。



中央神 土地を守護する神、地神であるが明確な性格はわからない。近年は家の改築などにより神社や堂宇に寄せられたものも多い。

(香椎神社)

6 経典に関する塔

経典を読誦したり、書写したりすることは仏教修行の一つであるが、これを行うことによって功德が得られるとし、その信心する経典の名称や経文を石に刻んだりして信仰心を後世に伝えようとしたのである。経典に関する塔はその目的、内容等によりいくつかに大別できる。



納経塔 通称「経塔さん」と呼ばれている。大乘妙典（法華経）を石に一字ずつ書写して埋めたものである。銘文から、干拓地の再興を祈願して明和三年（1766）に建立されたものである。（江戸 八大龍王社）

右側 武運長久
為国土安全
諸難消除
新田再興主

正面 大乘妙典書寫一石一部
明和三年
同庚寅季成就

左側 久保田久富村新田再興築建之
徳萬村昌永山龍光寺十一世日實代
土井工 柳川 吉兵衛
同支配人 長崎 下川丈助
同久保田永里村 大島作衛門

□ □ 山治兵衛
村山專治郎



奉 天下和順 當町住人
大乘妙典六十六部日本廻国供養
納 日月清明 施主 金兵衛

廻国塔 釈迦入滅後、弥勒菩薩がこの世に現れるまで、大乘妙典と呼ばれる法華経を六十六部書写し、全国六十六カ国を巡り、国ごとに代表的な社寺一カ所に一部ずつ法華経を納めることを目的とした、廻国の巡礼者が建立したものである。天保五年（1834）十一月建立

（町東 若宮神社）



南無観世音菩薩
南無阿弥陀佛百万遍
南無大勢至菩薩

百万遍念仏塔 百万遍とは「南無阿弥陀仏」を百万回唱える念仏行事である。念仏の回数が多いほど功德があると信じられ、その達成を記念して造立されたものである。安永二年（1773）十一月建立

（氷里 大正庵）

刻経塔—石塔に経典の名称とか真言、または経文の一部を刻んだ石塔を「刻経塔」という。

読誦塔—經典供養塔の主流ともいえるもので、この塔は特定の經典を読誦した記念に建てたものである。教典はもともと読誦することを目的としたものであるが、何部または何遍読誦したかということをも銘文としたものである。たとえば「奉読誦大乘妙典一千部」とか「奉唱満念佛百万遍」などと刻されている。大乘妙典は「法華経」のことである。

納経塔—写経したことやその經典を社寺に奉納したり埋経したり埋経した内容等を記録した石塔である。教典を書写することを写経というが、本来の写経は紙か布に書写するものであるが、小石に一字ずつ経文を書写して地に埋め、書写した教典の名とその目的などを彫った塔を建てるといいうものである。「写経塔」「一字一石塔」「廻国塔」はこれに類したものである。



延寶第四辰歲
現世安隱 愚萬宿
南無阿弥陀佛
后生善處 施主十五人
仲春温祥日

刻経塔 「南無阿弥陀仏」の名号が刻まれている。經典を書写したのが読誦したのか定かでないが、地区の安全を祈願して有志が造立したものである。延寶四年（1676）建立

（町東 若宮神社）

(二) 俗信

日々の生活や年中行事、あるいは通過儀礼といわれる人の一生のなかで、知識や知恵として伝承されてきたもののなかに、俗信と呼ばれるものがある。それらは気候・風土・生業など、それぞれの地域社会の特質をふまえた長い歳月をかけ、多くの人たちの経験に育まれて生まれたものは、日々の生活の中で有効な知恵として、また農作業や生活の指針として活用されてきたのである。

このような俗信は多様で禁忌・占い・予兆・呪い・民間療法・妖怪変化・幽霊などが含まれる。

1 禁忌

「何々であるから、何々してはいけない」とか「何々すると、何々になるので、何々してはいけない」という形をとる。占いはある行為や現象によって、未来の吉凶を判断することである。

結婚式には大安が選ばれる。葬式では友引きが避けられる。また何をするにもよくないというのが仏滅で、慶びごとには極力避けられた。

船の上で猿や蛇の話をしてはいけない。猿は魚が「去る」に通じることから、不漁になる。蛇はクチナワ、朽ちた縄は事故につながるからいずれも禁句であった。

カのカのゴンボウといって、ゴンボウ（ごぼう）の植えつけをするときは、七日（チノカ）のようにカのカのつく日以外を選んで植えつけをした。もし、カのカのつく日に植えると、ウレ（愁）ゴンボウ、供養のときに使うゴンボウになると言われた。

2 予兆

前兆ともいうが、何らかの現象によって未来のことを読み取ろうするものである。その対象となるのは自然や天体現象の異常、動物などの特別な挙動、植物の異変、夢見などの行為、身近かな器物の破損など多岐にわたっている。

全国的な広がりをもっているものに、「茶柱が立つと、良いことがある」というような心理的なものから、「鳥鳴きが悪いと、人が死ぬ」という、死の予兆ともいうものがあるが、これなどは土葬が行われていたころ、埋葬後の墓地の供え物をあさる鳥を連想してのことだろう。これらは荒唐無稽な俗信といえる。

出漁のときに、女性と出会うと縁起が悪い。漁に出かける前に、女性と出会うと網を破ったり不漁になるといって嫌った。

3 呪い

霊的な存在や呪力などの超自然的要素を用いて、何らかの願い事を実現させようとするものである。呪いと共通したものに祈願がある。

雨乞い祈願 香椎神社では、沖祇神社まで神輿を二台担いで祈願したことがある。

虫除け祈願 大正初期にウンカ(メイチュウ)が大発生したとき、鉦を叩いて田をまわり集落境で追い払った。

風止め祈願 七月二十五日ごろから九月二十五日ごろまでに、三養基郡中原町の綾部八幡神社にお参りし、お札を貰ってきて、竹に挟んで田にさしていた。

4 ことわざ

雲仙腰巻多良頭巾 腰巻きのように山の裾をとりまく雲や、頭巾を被ったような山頂の雲ができると、やがて雨になるといふ。いずれも山に吹きつける気流の乱れによってできるもので、天気悪化の兆しとする。

春南風雨難し 春の南風は、雨が降り難く天気が良い。

東風吹き止れ 東風が強く吹き続いたあとに、風が止むのは雨の兆しである。

夏の夕焼け宵に越せ 夕焼けは西の空が暗れていることを示すので、翌日の天気は良いが、春夏は逆になるこ

とがよくある。大雨になる前兆なので、前の晩のうちに、川を渡ったほうが良い。

秋の夕焼け宵に鎌とげ 夕焼けになると、翌日の天気は良い。前の晩に鎌をといで、翌日は早朝から稲刈りに備えよということ。

秋東風や池干す 秋ごろの東風は天気が安定する。この風はフェーン現象を起こして道も庭も乾燥してほこりっぽくなる。池まで干しあがつてしまつていふことであらう。

上妻夕立来たことなし 「上妻夕立音ばかり」ともいふ。上妻は福岡県八女市方面で、久保田からは東南方向にあたる。夏の気流は、南西から北東へ向かって流れるので、上妻方面で発生した雷雲はこの気流にのって、北東方の福岡県内へ移動するのが普通だから、音ばかりで来そうに見えても来ないという。

百舌鳥の高鳴 モズが空高く飛びまわるのは、大気が上空まで安定しており、良い天気であるということ。

夜明けのバラナキヤ、カンバツ日和 「朝雨は女の腕まくり」と同じ意味で、早い天気回復を表したものである。晩秋から冬にかけて大陸から張り出した高気圧の前では、一時しぐれがばらつくが、天気回復は早い。

たちやあバラバラ、わいドウドウ 「たちやあ」というのは満潮時、「わい」というのは干潮時のこと。満潮のときにバラバラと雨が降りだすと、引き潮につれて次第に雨はひどくなつて、干潮のときはドウドウ降りとなる。

朝東風・昼南風、夕西、夜北ん風 天気が安定したときに吹く一日の風向きの変化を表したものである。朝東風が吹き、昼南風となり、夕方西風に変わり、夜は北風と規則正しく変化する。